

経営と健康

第1回

嘉義農林甲子園の活躍

講談師 一龍斎貞花



東日本大震災に、二千三百万人の国から三百億円近い義援金を贈ってくれた親日の台湾が、今懐日ブームと言われている。そのきっかけになったのが、「KANNO 1931海の向こうの甲子園」という台湾制作の映画だが、主役は日本人で十億円以上の配取と言われている。

KANNOというのはユニフォームの横文字。シャープが鴻海の傘下となったが、親日のようにうまくいくことを願っています。

「練習時間に遅刻するとはなんだ。罰として市内一周走ってこい」

「ハイ」

「走ってきたか、では練習をはじめろ」

ノックの雨、スコールがきたが雨の中泥んこになりながら練習。

「お前たちは、野球をやりたいか」

「やりたいです」

「甲子園に行きたいか」

「甲子園ですか？ 僕たちは今まで一度も勝ったことがありません」

「じゃあ行きたくないのか」

「行きたい。甲子園は夢です」

「行きたければ練習だ。毎日市内一周ランニング。そのあと練習だ」

「厳しい監督だな。甲子園なんて行けるわけないだろう」

「イヤ、近藤監督は松山商業の選手として甲子園に出場し、その後監督として春の大会で優勝したんだそうだ」

「へえー。そんなすごい人が、俺たちの監督になってくれたのか」

走れ走れ、選手たちは「コウシエン」を合言葉に市内を毎日走る。その姿に町の人たちは「がんばれよー」

明治二八年、日清戦争に勝利を収め、

台湾を譲り受けた日本が統治。大正八年原敬首相は、内地延長政策を推進するため台湾総督に田健治郎を任命。それまでの武官から初の文官総督となり、原住民の学校がない、それではいかんと日本人、漢民族、原住民の三民族共学の制度を作り、こうして嘉義農林中等学校が創立され、昭和三年野球部創設。基礎がないから全く勝てない。そこで島内校長は、嘉義商工専修学校で簿記を教えている近藤兵太郎に指導を依頼、かくして野球部の監督に。

近藤は、全国中等学校野球大会に出場しアメリカに遠征した名選手。卒業後監督をつとめ春の甲子園大会に優勝。教え子には、巨人、阪神などで監督を務めた藤本定義、森茂雄を育てたものの負けるのが大嫌い、頭ごなしに選手を叱りつける鬼監督。こうした指導ぶ

りが後援会と対立し、松山商業を去り、台湾に先生として赴任。

三民族混成チーム

原住民のアミ族が住んでいる台東にまで足を延ばし、テニス部、陸上の選手を野球部に勧誘。本島人と呼ばれる漢民族は打撃がいい。高砂族と呼ばれるアミ族、プユマ族は足が速い。日本人は守備が巧く、細かいプレーが出来る。これをうまく活かせば勝てる、近藤は考えた。近藤は選手を見抜く目を持っていて、高雄商業との練習試合で相手投手を一目見て「必ず大物になる」と見抜いた選手こそ、のちの青バットのホームラン王天下弘でした。

「お前たちを甲子園へ連れて行く、行くんだ」を口ぐせに毎日猛練習。

「野球場は神聖な場所である。必ず一



礼してグラウンドへ出ることに。いいか球は靈なり、魂を込めてボールに向かっ

ていくんだ。わかったか」
 一昨年郷里松山に「球は靈なり」の文字を刻んだ顕彰碑が建てられました。鬼監督と言われる一方で、部員たちを我が子同様に思い給料をつぎ込んでまで面倒を見るので、幼い二人の子を抱えた妻は生活を切り詰めて夫を支えます。選手一人ひとりの性格を見抜いて指導し、負傷した選手にはとことん目を掛け、いつしか選手達は「監督のために、監督のためだったら」と、心を一つに打ち込んでいったのです。

この育成ぶりは、社員育成と同じです。活用につながっていきます。

水不足から作物が獲れず、遠くから水を汲んできて田畑に水をやる。水汲みの手伝いをする学生もありましたが、昭和五年、八田興一が十年かけて完成させた東洋一の十五万ヘクタールの鳥山頭ダムのお陰で、台南、嘉義は台湾最大の穀倉地帯へと生まれ変わります。日本が統治していたので台湾人も日本名。李登輝さんは岩里政男という日本名。ご自身も「私は昭和二十年、

二十一歳まで日本人でした」と言われます。日本語のみを強要したように言われていますが、学校教育は日本語でわけていますが、学校教育は日本語でしたが、日常では台湾語の使用自由。戦後蒋介石は日本語一切禁止、三十八年間も戒厳令。そのため日本語を話したいとこっそり集まって日本語で話す人達も。

若者たちは、学校教育で日本は悪いことをしたと教えられたが「あの頃は良かった」と日本統治時代を懐かしむ祖父・祖母の言葉。中国との交流が盛んになった時「同じ民族じゃないぞ、我等は台湾人なんだ」。そしてKANOの映画が懐日ブームへの推進になったのです。

一九一五年に、中等学校野球大会、今の全国高校野球大会が始まって、今年で一〇二年になります。

一九二一年、大正十二年から台湾の代表も甲子園に出場、日本人だけの野球部の台北一中、台北商業、台北工業の三校が代表を独占。

「ナニ、嘉義が甲子園だと、日本人、漢民族、高砂族の混成チームで勝てるわけないよ」

そんな日本人も少なくありません。

「いや、それぞれの長所を引き出し、俺はこのチームを必ず甲子園へ連れて行くんだ」

近藤は自らを鼓舞すると共に、球は靈なり、民族を超越し一丸となって野球に打ち込む選手達を更に厳しく指導していきます。

「お前は外角高目を打つのはうまい、だが内角は全く打てん。相手投手はくせを見抜いて外角へは投げん。いいか外角の球は打つな、内角の練習をしろ」

練習に内角ばかり投げさせる。

「明捷、腰が高い、それではスピードが出ない、重心を低くして投げろ、コントロールもよくなるぞ」

「この投手を打つのは難しい、それは疲れさせることだ。三振してもいいからツーストライクまで待て、出来れば2-3まで粘って打て」

高砂族の選手が、作戦を無視して初球を打って三塁打になったが、

「好き勝手にやってはいかん、監督の作戦命令には必ず従うこと。二番打者がポイント、一番打者が出塁したらバントで送ると共に、自分も足を使って一塁に生きることを考えてプレーしろ。」

二番打者はバントが巧く、足が速くなければいかん」

毎日午前中授業、午後一時半から三時半まで農業実習、野球部だからと特別扱い無し。それから嘉義公園球場で日没まで練習、全員寮生活、寮へ帰るのは午後八時。休日は一日中練習。試合のある日も午前中練習。豪雨で球場が使えない時は教室で、規則、作戦、技術向上の講義、精神上の訓話をする。当時の部員は十四人。

初めて勝った時の感激は大変なものでした。

昭和五年夏、嘉義農林は台北圓山球場で台湾予選初の決勝戦に出場。五回を終って1-2と台北一中にリードされて迎えた六回の表、一死三塁二塁、一打出でんか逆転という絶好のチャンス。ところが一転にわかにかき曇ったかと思うや車軸を流すような大雨に、コールドゲーム、あえなく敗退。逆転出来たかもしれないと悔しさ一杯。しかし甲子園へ行けるぞという自信にながっていったのです。

目標に向かって邁進する嘉義農林の活躍にご期待ください。ポポポポ